

平成27年度 熊本市療育支援ネットワーク会議

第2回課題別会議

日時：平成27年8月24日（月）18：30～

場所：熊本市総合保健福祉センター 1階大会議室

次第

1 開会

2 熊本市挨拶

3 議事

テーマ「ネットワークを動かす支援者（人）をどのように支援していくか」について

4 その他

次回日程について

5 閉会

出席委員 菊池委員、山田委員、清田委員、福岡委員、森本委員、田中委員、矢島委員、
荻迫委員、後藤委員、硯川委員

事務局 上妻障がい保健福祉課長補佐、井上青少年育成課主幹、林子ども支援課技術主
幹、村尾保育幼稚園課主幹、大谷子ども発達支援センター所長、幅発達障がい
者支援センターみなわ所長、竹内北区役所保健子ども課地域健康第一班主査、
松永総合支援課指導主事

議事録

1 開会

(事務局)

略

2 熊本市挨拶

(子ども発達支援センター所長)

略

3 議事

(座長)

みなさん、こんばんは。それでは、今年度2回目ということになりますけれども、課題別会議を進めていきたいと思えます。現在まで、かなり多角的な観点からの議論を進めていただいております。特に、保育園、幼稚園の先生方への支援ということについて、これは保育園連盟のアンケートをもとに、実際の先生方が現在困ってらっしゃることということが、かなり浮き彫りになってきたんじゃないかなというふうに思っています。具体的には、保護者への対応の問題とか、子どもに対する支援ですね。あるいは、園全体の共通理解の難しさであるとか、職員の理解に格差があるといったような問題であるとか、あるいは、関係機関との情報交換であるとかですね。あるいは、移行支援の難しさということもかなり話題にあがったかなというふうに思っています。で、前回中心に議論していただきました、学校の先生方の件については、学校の特別教育推進体制、点検シートですか、そちらのほうを利用いたしまして、課題についての記載事項をまとめた資料をもとに議論をいただいたところでございます。その中で人的支援不足であるとか、個別の支援計画の活用が不十分であるとか、あるいは、教員のスキルアップであるとか、他職種、専門職との活用といったことが話題になったかなと思います。また、かなり中長期的な視点からも問題と思うんですが、情報交換ネットワークの問題であるとか、ネットワーク作りですね。このあたりが課題があるのではないかといいことがあげられたかなと思います。特に、その短期的な視点と中長期的な視点というのを少し分けると、やはり短期的な視点ということからは戦略的な研修体制ですね。これをどう作っていくかということと、少し中長期的な視点からいうとやっぱりネットワーク作りですね。特に他職種であるとか専門職とのいわゆる連携ですね。あるいは、学校間との連携といったことが話題になっていたのではないかと思います。本日の資料で、皆様の御意見をまとめた形で提供されているのではないかなと思います。資料1のほうに主に保育園、幼稚園の話題、資料2のほうに学校の話題ということで事務局のほうで丁寧にまとめていただいているというところです。今回は、これまで討議いただきました内容をさらに深める形で議論を進めていただければと思います。具体的には、まず、前回学校での議論の続きを少し行いながら、できればその後、保育園、幼稚園のほうの支援体制といったことについて話しを深めていきたいと思っています。さっそく議論のほうに入っていきたいと思うんですけども、まずは前回の続きというところで、学校を主な話題として、もう少し深めていければなというふうに思っています。実際の現場の実感等含めて先生のほうから口火を切っていただければありがたいかなと思っているんですけど、いかがでしょう。

(委員)

すみません。前回、欠席したので、さっき前回の議事録のほう読ませていただいて、指導計画とか支援計画とかあったんですけど、確かに支援学級のほうでは指導計画はしっかり作っているのかなというのがあります。通常学級のほうでは、おそらくほとんど作っていないというのは、データの中で、いくつか学校に行った中でそういうふうに感じます。担任の先生の多忙感というの、もちろん、その時間に余裕がないというのもあるのかもしれないですけども、その先生によって、そのお子さんの見方っていうのはやっぱりちょっと違うのかなと。資料にもあったように、知識、理解がある先生とそうでない先生の差

ってというのは確かにまだあると思います。そういう点で作ったほうがいいっていうのは、作っているほうから見れば、作ったほうがいいっていうのは確かに感じているので、そういったのも作ってあげればいいのかというふうに思っています。あとは、あたりはずれとかという表現もあったんですけど、なんとかして、そういうのが今後なくなって、同じレベルの支援というのが提供できるようになるとしたら、子どもたちにとってはすごくプラスになるんじゃないかなというふうに私は思いました。すいません。あんまりまとまりない話ですけども。よろしいでしょうか。

(座長)

ありがとうございます。前回の中心的な話題にもなりましたがけれども、指導計画の作成といったことに関して、現状として前回の話のなかではやっぱり教員間格差あるいは学校間格差といったところがまだ大きいのではないかと。そのために研修、いわゆる、指導計画の作成の研修といったものをもうちょっと打っていくべきではないかといったような話題も出ていたかと思えます。他いかがでしょうか。今の指導計画の作成と活用といったところについて課題があるというふうな御意見だったと思えますけども、いかがでしょうか。何か御意見ないでしょうか。同じく学校現場ということであれば中学校の側から話してもらいましたが、小学校、前回も御発言いただいたと思えますけど改めていかがでしょう。ここらへんのデータとか、まとめていただいた資料を見ていただきながらですね。

(委員)

個別の教育支援計画や個別の指導計画ですね。まだこれから作っていく段階があるのかなというところで、特に個別の指導計画に関しては、通常学級は、担任だけで作るというのがあって、それを職員で共通理解する場っていうのもないかなというのが現状なので、活用の仕方とか作成の仕方あたりの研修はまだ深めていくべきではないかなというのは1点感じているところです。もう1点は、特別支援教育コーディネーターについて、複数配置っていう形になってますけども、逆に特別支援学級の担任であったり、通級指導教室の担当者というのが主に研修会は参加している率が高いので、通常学級でコーディネーターをされてらっしゃる先生方もやはり研修会に足を運ぶような体制っていうのを整えていかなければならないのではないかなというふうに思っています。以上です。

(座長)

はい。ありがとうございました。今ちょっと話の中で通常学級担任が1人で作る場合があるっていうようなことですけども、いわゆる、コーディネーターはあんまり絡んでないなっていうようなケースというのが実際に結構多数あるわけですか。

(委員)

そうですね。学級支援員配置に関わる個別の指導計画作成というところが、1つ学校現場ではあるんですけども、そのあたりの際に学期初めに作ればいいのですが、やはり、ケース会などであがってきた児童に関しては、より学級支援員をクラスに配置したいというところで、早急に担任が個別指導計画を作って提出、委員会あたりに提出をしていくというような現状がまだあるのかなというようなところがあります。

(座長)

最終的な支援計画の素案とか、作成をするのは、通常学級担任がある程度最初の段階ではするということには分かるといえば分かるんですけど。問題はいわゆる、校内

の支援体制を決めていくときに、当然そのコーディネーターもそうですし、あるいは、管理職も含めて、あるいは、支援計画を作っている保護者の意向をしっかりと聞くとか、そういうシステムというのがどうなっているのかなというところは、多少は今話の中で気にはなるんですけど。そのあたりのシステムというのは、実は学校によりけりみたいな感じが強いわけですか。

(委員)

現状としては、ケース会議とかをもとに個別の指導計画を作成して行って、共通理解をしていくというような場もあり、担任が単独で作成をしてコーディネーターに見せて、それで提出をしていくというパターンがあり、学期の評価をきちっと担任だけで評価をしていくパターンであったり、ケース会議を持って評価をしていくパターンだったりこのあたりも学校間格差があるので、コーディネーター研修あたりでそこらへんは高めていかなければならないのかなというところは感じています。

(座長)

ありがとうございます。そのへんの、いわゆるコーディネーターがどこまでどういう動きをするのかということが、いまいち定まっていなかったのかなというのが、例えば、ケース会議を開催するのも結局どの子を対象にしたケース会議を開催するのかどうかというのを、例えば、主体的にコーディネーターが決めるところもおそらくあれば、担任がお願いしますと言ったらやりますみたいな形になっているところも結構あるんじゃないのかなというのを今話を聞いて少し思ったところです。そのあたりがいわゆる、ケース会議等で、支援のルールに乗せていくというところで、少し担任の先生まかせ的部分というのが非常に強いのかなという感じが多少したところですね。はい。他いかがでしょうか。今の問題も含めて、いわゆる、学校の中の校内支援体制をどう作っていくかといったときかなり実際のところは人、つまり、通常学級担任とかコーディネーターの理解とか力量にいろいろ左右されるというところの課題があるという実態があるかと思うんですが、いかがでしょうか。北ネットからどうですか。

(委員)

はい。やはり、いろんな学校をまわらせていただく中で、先生からもありましたけれども、学校によっての差というのはあるなと感じています。とてもよくまわっているところは校内の体制、校内委員会であったり管理職の方がしっかり入っていらっしゃる場所では、案外、よく計画よりも動いているというところはあります。担任まかせ、どっちが作るとかそのあたりで苦労されているところも実際あります。先日、ちょっと会議があつて、いつも中心で動かれているコーディネーターの先生ではなくて違う複数のコーディネーターの先生が参加された会議があったんですけども、主にされている先生はとても理解をされているんですが、それ以外のコーディネーターの先生はなかなか学校全体のところまで把握されていなかったということもあつて、人によってもちょっとまた違うのかなというふうにも感じます。

(座長)

今の人によってはっていうのは、複数指名をされているところで、主になる人とそうでない人で理解がちょっと違うというような話ですよ。学校の中で。

(委員)

はい。学校の中である程度理解が進んでいるのであればその周りの先生方もある程度ご存知なのかなと思うんですけども、やはりご存じないところが意外にあるんだなというのはありました。

(座長)

ありがとうございました。今、先生がおっしゃった話というのは、私も結構いろんなところをまわっていく中でやっぱり実感するところではあるんですよね。学校全体でうまく職員間の共通理解という言葉に置き換えるとそうなるんですけど、うまくリソースが配分できてるといえるところは、比較的うまくまわっているんですよね。どこかで誰かが頑張っていると、例えばコーディネーターが1人でいろいろ全部抱えすぎだとか、あるいは、逆にコーディネーターが何もしなさすぎだとかすると、どこかにつけがまわって、どっかの担任が頑張るとかですね。そういうふうにあんまりなりすぎると、なんかどこかで無理がたたってうまくいかないみたいなそういう実際があるかなと思います。ですから、いわゆるコーディネーターはそもそもコーディネーターという名前のおり、きちんといわゆる支援、学校の中の支援リソースをうまく配分していくみたいな、そういうことができればいいんですけども、それがなかなかうまくいかないと、結構いろいろ大変みたいな感じが増えているなどちょっと思ったところです。そのへんはコーディネーターの仕事の大枠が実は結構あんまり定まってないんじゃないかと思います。学校によっては、あれもこれもコーディネーターがやりなさいみたいな感じだったりするし、あるいは、学校によってはコーディネーターは本当に外部との交渉役だけをする人で、あんまり校内の中で自分が何をとかいうようなことはやってないってところもおそらくあるんですよね。ですので、そのあたりが少し枠組みを決めて、これくらいのことをお願いしますとか、そういうふうなのをきちんと研修をしたほうがいいんじゃないかなと多少は思うんですが。他いかがでしょうか。学校現場のお話ですので、先生いかがですか。

(委員)

個別の指導計画と個別の教育支援計画のような、学校の支援、学校のそういう体制の話になると思うんですけども、小学校をいくつかまわらせて、先生方とお話させていただく中で、小学校の先生方、自分も同じ職業で率直なところとても忙しいというのが、時間的に非常に厳しいなっていうのが小学校の先生方、特に高学年の先生方、授業を1時間目から6時間目までやって、授業準備もされるわけなんですけど、そのあと保護者の対応だとか子どもの対応だとか会議があったりとか、そのあと部活動して、そしてまた翌日の準備ということで、非常にどっかにこう先生方にもう少し子どものことでゆっくり話せる時間だったりとか、そんなことがないとなかなかまず勤務として非常に苦しいというのがどこのだいたい小学校行ってもいえることなんですけど、そこをまず感じてしまいます。中学校のほうも同じです。いろんな先生たちが、生徒指導上の問題が起こりますのでそちらで非常に苦しいなっていうのを小学校、中学校でまず感じているところです。それで、それは状況なんですけども、個別の教育支援計画を立てるときに、先生方でどの視点で誰がその子どもの状況をどんなふうに見ていくか、それから、その状況に対して何が問題でその問題に対してどうゆうふうな手立てをしていくかということがきちっと見通しが立つように持っていけないとうまくいかないですね。学校の中でチームでケース会議、クラスだったり学年であったりといったケース会議。まず、一次的ないろんな気づきのなか、次は校内で

の支援体制、一次、二次、だいたいできているんですよね。そういう形はマニュアル化されているというか、コーディネーターの支援マニュアルが県の教育委員会から出ていますし、熊本市もそうゆうのがありますので、見ていただくとだいたいどうすればいいかわかりますし、全国的にもそのあたりの進め具合というのはだいたい似てると思いますね。次にそれでもうまくいかないときどうするかということで、相談、巡回相談を使いましょうとか、大学の先生方に相談しましょうとか、あるいは、専門機関に相談しましょうということで進んでいっているんだと思います。そういうところを学校側がわかって次はこうしようということである程度先導してくれる、コーディネートしてくれる役割がコーディネーターであるというふうに思うわけなんですけど、今話があったように、学校によってまちまちだというのが現状でそれがうまくいっているところがあればうまくいっていないところもあるというところの現状があると思います。そこも、個別の教育支援計画を立てるときの研修が絡んでくるのかと思うんですが、子どものどこをどんなふうに見ていくかというところが、学校の先生方と話していく中でなかなか分からない、問題は分かる、いろんな困っている状況、学びにくいとか生活しにくいとか、いろんなファクターがたくさん出てきていて、どっからそれをほどいていけばよいか、どんなふうな形を作っていけばよいか、そこが学校現場の先生方と話していく中で1番わたしに求められているところです。おそらく、小学校中学校の先生方もたくさんの業務の中で、障害のある子どもあるいは障害の疑いのある子どもに対して、どういう方針でどんなふうにしてという、そこがもう少し見えてくると先生方が動きやすくなっていくのかなと思います。「あ、そうだよね。」ということでそれを共通理解して、まず短期の目標を立ててやっていく。そういうふうな形作りというのを示すだけで、学校の中でのネットワーク作り、まずそれができないととてもネットワーク作りなんてできないんじゃないかなと思うわけですね。校内や園とかで、ネットワークの形というのをある程度こちらからお示しして、そこで校長会なりコーディネーターの会議などで「こんな形で提案します。学校の中でのネットワークを作ってください。」と、そしてそれを集約する形で次の他機関にとか、そんなことで考えていけたらなというようにことを思っています。

(座長)

はい、ありがとうございます。今のお話を聞いた中で、いわゆる校内のネットワークを最初にしっかりと作っていく、そのあたりがコーディネーターにとっては非常に、果たさなければいけない役割なんだろうけれども、なかなかうまくいっていないところが実際あるかな、というお話だったと思いますが、今のお話を聞かれてどうですか。ちょっと改めていくつか学校現場、いろんなところ入られてると思いますので、今のお話どう思われますか。

(委員)

そうですね。コーディネーターの先生が中心にはなっていくんですが、コーディネーターだからといって全部押し付けるのではなくて、やっぱりチームとして、学校の組織作りというか、体制作りが大事なのかなと思います。コーディネーターだけじゃなくて担任の先生もそうですよね。どうしても一人になってしまうと困るという先生方いらっしゃるので、やっぱり学校の中全部、先生方引き込まないと、うまく進まないと思っています。

(座長)

今、先生方の話を聞きながら、私が学校とかに入っていくってケース会議に参加したりとか、そういったときにやっぱり先生によっていろいろな理解の仕方がそれぞれなので、どこを切り口に話していけばこの先生に入っていくのかなというのが不透明な部分が実は結構多いんですよ。このへんが、私は一応臨床心理士としての立場で、話したりとかするんですが、いわゆる専門職としての、同じ臨床心理士なら臨床心理士としての話をするときとやっぱりだいぶ違うなと思います。どういうものの言い方とかどういう価値観をすれば入るのかなというのが、結構違うんですよ。やっぱり学校の先生だからいろんな人材がいますよね。そもそも専門教科が違ったりであるとか、あるいは職種として養護教諭とか全然違う立場の人もいればみたいな、こんな感じにやっぱりなってしまうので、そのへんがすごく共通理解するのが難しいのかなと思ったりもします。専門職という立場からでするので、このあたり専門職と学校の先生との違いみたいなこととか、あるいは先生が学校の先生達にお話する機会も結構あると思うんですけど、そういう時に何か感じられることとかありますか。

(委員)

そうですね。学校の先生だからというわけではないんですけど、幼稚園の先生、保育園の先生もそうなんですけど、子どもの違いは分かるんですけど、教えていく時に問題行動をどうしていくのか、先生は少し精神発達のほうからで、私とかだったら少し子どもの成熟というか、脳機能がどのように成熟していくかというところで話をするんですけど、やっぱり経験させる上での本当に基礎の基礎のところを、子どものいろんなことを学ぶ基礎のところを、特に見えない部分ですよ。ここはやはり逆に先生達にもっと情報を発信して、行動上の問題があったときに、少し例えば「脳の機能で動きを感じる感覚が、実は感じ方が鈍くて動き回ってるよ」と、割とそういうところをお話しすると、先生達も「そういうところが原因なんだ、じゃあ自分たちの指導を少し視点を変えていこう」とかですね。やはりそういうふうに子どもをどう理解するかっていうのは、担わなければいけない役割もあるのかなと思います。だから、ちょっと話の趣旨からは外れるかもしれないですけど、研修といったところで、やはり子どもを多面的に見ないといけないですし、あとはやっぱりご家庭の育て方とかも入ってくると、職能団体の人間といってもそこはちょっと入れないとかですね。確かに子どもを理解する上で、先生達が多面的に見られるためのリソースというか、そこらへんを提供する義務は我々にあるのかなというのは感じています。

(座長)

はい、ありがとうございます。私も同じようにやっぱり思います。要するに先生達に話していく時に、例えば私は心理学が基本ですので、心理的な子どもの発達、この理論にのっとって、ある程度この角度から見ると子どもをこういうふうに捉えて、あるいは子どもの問題行動は、いわゆる学習という学説からいくと、いわゆるABCという先行子があって行動があって、それが強化されていますよみたいな話をしていくわけなんですよね。それをある程度理論的な部分で、「こういう立場から見るとこう見えますよね」という形で話していくというのが基本なんですよね。ですが、それが学校の先生達っていろんな立場の人が集まっているので、共通に例えばそういう子どもを見る切り口が、結構定まってない。ケース会議をしても多面的な理解ができるし、コーディネーターの先生が、例えばこれでいくっていうふうに言っても、違う立場から見るとそれはどうなのかなみたいなとか、

いろいろ出てくるんだろうなとは思いますが、先生が今おっしゃったように結局研修でしっかりと、いわゆるスキルアップ研修みたいな形を展開していく時に、例えば多角的な視点ができあがっていくように、例えばテーマごととか、理論ごととか。今回は少し医学的な観点を中心とした話をしていきたいと思いますとか、あるいは、今回は行動分析的な観点からの研修をすすめていきたいと思いますとか。いわゆる多角的な研修をなるべくいろいろ網羅して、先生達が順次受けていって専門性を高めていくといったようなことが必要になるのかな、あるいはそういう時期に来ているのかなとは少し思います。いわゆる発達障がいとはこういうものかという概論を一生懸命研修していた時期がある程度終わって、その次の段階の研修をどう打ち出していくか、というところに来ているのかなと思います。いかがですか、保育園幼稚園の立場からでも、いわゆる研修というところでは少しずつ関係してくるのかなとは思いますが、今は学校現場の話が中心になってますので、あれなんです、いかがでしょうか。

(委員)

どちらも抱えている問題は共通なんだなというのは、よく感じました。先生方のお話を聞いて、完全に時間が足りない、人手が足りない、というところも全てですね。でもこれは言っても仕方がないことなので今のスタッフの中で、どう作っていくかということを工夫するのが、私達の立場の人間なのかなというふうには思っています。それで、学校になくて幼稚園保育園で活用できるっていうのが、保護者のパワーなんです。発達障がいとか、困り感をお持ちの保護者の方の集まりをしまして、その方達がお互いに情報交換をして、「こういうふうに乗れ越えたんだよ」とか、「こんなことがあるけど一時時間がかかれば何てことなかったよ」とか、みたいなことを聞くと、自分だけじゃないんだという安心感が得られて、またその方達クラス懇談会の中で、他の一般のお母さん達と話しながら、そうすると、実は私たちが問題視していないお子さんのご家庭でも、「この子大丈夫かしら」と不安感を持ってらっしゃる方がいらっしゃったりするんですね。ですから、園内ではそういう研修ができるということ。それと全体的には、保護者に絞り込んだ研修っていうのが、毎回申し上げているんですけど少ないですね。保護者の方だけが集まってできる、研修会みたいなのを、講師の方から教えていただくというのが、前回からのテーマだったと思います。それがちょっと少ないなっていうのをいつも感じています。それから保育士に限って言わせていただくと、経験年数別に分けて、同じテーマでもおそらく先生方が伝えたい、お話されたい内容が変わってくるのではないかなと思うんです。若い職員、経験年数が浅い職員は、知識不足、勉強不足で知らないということが大きいですね。ある程度長い職員になりますと、自分の経験だけで思い込みで決め付けてしまうという部分の危険性があるので、そこらへんを一緒に研修をするのはちょっと難しいというふうに思います。だから、園内研修では、そういういろんな分け方を工夫しながら、担任の年齢別とか経験年数別とか職種別という分け方をしながら、つぶしていかなければいけないと思っていますけど、少しでも保護者の悩みを解決していくようなシステムができればいいなと願っています。

(座長)

ありがとうございました。先生、いかがですか。

(委員)

幼稚園の方も、やっぱりそれぞれの私立の幼稚園でいろいろ違うところが多いんじゃないかなと思います。状態とか差というか、やっぱり違うところがすごくあるんじゃないかなと思うんです。うちの系列の園では、白山じゃなくてもう1つの幼稚園の方なんですけど、特別支援クラスがあり、また、特別支援クラス以外で普通のクラスにも支援が必要なお子さんがいらっしゃるんですけども、研修もしてますけど、夏休みの間はひばり園さんとかいろいろな療育機関に職員が伺って、その子どもたちが日頃どのような療育を受けているかとか、そういうことを実際に見せていただいたり、話を聞いたりしています。夏休み以外も療育機関から来ていただいて、子どもの様子を見ていただいたりしながら、いろいろ勉強している園です。他の園ではどんなふうにされているのかがちょっと分からないんですけども。

(座長)

はい。ありがとうございます。なかなか、保育園、幼稚園でも学校と同じように、研修するにしても時間がなかったりであるとか、そもそも経験年数であるとか、そういったところの違いによって、研修の狙いをどこに持っていくのかと非常に難しいので、保育園、幼稚園ではある程度、そのあたりを若い人とベテランの方といった形で分けての研修というのを組んでいるという話ですけども。学校現場ではそういう研修というのは、法定研修としての10年研とかそのあたりはある程度あつたりしますよね。どうですか。総合支援課のほうは、そういう先生達向けの研修というところで、何か例えば、経験別とか年代別とかみたいなことで組んでいるようなことってありませんか。

(総合支援課)

はい。今年度7月の29日に行った、特別支援学級と通級指導教室担当教育研修会、熊本市内の特別支援の学級、通級指導教室の悉皆研修になるんですけども、今年度は、学級種ごとに分科会として研修の方を行いました。前年度は、テーマごとに研修を行っています。そしてその以前は、経験年数ごとということ、例えば3年未満の先生というようなことで研修を組んでいることもあります。今年度につきましては、様々な検討をして、学級種ごとでそれぞれの学級種ごとの専門性の向上を狙ってというようなところで学級種ごとの研修ということで行っております。毎年度、担当の方が中心となって、担当が研修の内容については検討しているというような状況です。

(座長)

はい。ありがとうございます。学級種ごとというのは、かなり人数に偏りがある感じがしますけれども。知的とか情緒とかに分けた感じになるんですか。

(総合支援課)

はい。今年度は、知的の小中学校、高校での分科会が1つ。小学校の自閉症情緒障害学級で分科会が1つ。中学校の自閉症情緒障害学級で分科会が1つ。あとは、そこが一番種類が多いんですが、肢体不自由、病弱、院内学級、難聴、そういったところでの分科会が1つ。そして、最後が通級指導教室で分科会が1つということ、組んでいるんですが、やはり、担当するスタッフとか、その人数とか、あとは研修会場とか、そういったことも含めて総合的に、その年度でどういったことが開催できるかというようなことと、先生方のニーズにいかにか答えていくかということ、ところを考えた上で、研修を組んでいます。

(座長)

はい。総合支援課もいろいろ工夫を重ねながら、研修体制を作っているというふうなところですよ。その、知的と情緒が一緒になっているような学校が時々ありますよね。実際、運営上一緒にしちゃってるみたいなのところ。そのあたりは区別できないですか。種別に分けるみたいに言ったんですが、そういう話がありますか。

(総合支援課)

今年度については、それぞれ先生方が担当されている学級種ごとの参加をお願いしますということで通知していただいています。次年度以降で検討する1つとして、学級種ごとでお願いはしているんですが、各学校の担当されている子どもさん達の状況に応じて、例えば、私は自情学級の担任なんですが、知的の方の分科会で、今年度の形で組むとして、学校で先生のニーズに応じた分科会の参加をとというような形も検討する部分ではあると思うんですが、やはり先ほども少し申し上げたんですが研修会場等の兼ね合いで、どこかに集中したりするとなかなか開催自体が難しいというような状況なども出てきたりするので、ある程度こちらの方でこの人数以内でというようなことも考えておく必要があるのも、また対応については検討してきたいと思います。

(座長)

はい。ありがとうございました。通常学級担任に向けての研修は何かありますか。

(総合支援課)

はい。通常学級の先生方を主とするようなことではないんですが、8月11日に熊本市特別支援教育セミナーということで実施をしております、そちらの方では学校の先生方、あとは関係機関の方、保護者の方ということで広く参加の方は呼びかけておまして、保護者の方からも、人数の把握は確実に私はちょっと今できてないんですが、参加はございました。

(座長)

いわゆる県がやってる悉皆研修をやっていくみたいな、それで4年間で通常学級担任は全員受けないといけないみたいなのをやっていくというような話ではないんですか。それは希望者ですか。

(総合支援課)

はい。その特別支援教育セミナーについては希望者の方による参加ということです。

(座長)

はい。ありがとうございました。支援学級の先生達向けとしては、かなり市部会研修とかテーマ別とか工夫がされて実施されているということでしょうけれども。通常学級の先生になると、どうしてもある程度希望制といった形で、学びたいという人が来るという形になっているところが現状かなと思いますので、市教委がいろんな手を打たれて参加率を上げていこうとか、そのあたり努力されているのは存じていますけれども、そのあたりは1つ現状としてあるのかなと思います。他いかがでしょうか。先ほど、保護者の集まりとかそのあたりの話が出ましたので、いかがでしょうか。保護者の場合は研修じゃないですけども、そういった件に関して。

(委員)

そうですね。保護者の研修というのは、いわゆる教育委員会の方からありました、関係者皆さんご参加くださいというところに興味があって、わが子のことにとても悩んでおら

れる保護者の方が行かれているというのが多いパターンになっているかなと思います。それから保護者の立場から学校の中、校内支援体制の動きが一体どうなっているのかなというのが、わが子がどうなっているのかというのが見えにくいというのはよく聞きます。こう言うといけないかもしれないですけど、困った時だけ呼び出しをされるとか、そういったこともよく聞きます。学校でのわが子へのきめ細かい対応ということがよくわからないのに呼ばれて、「問題行動があります」なんて言われることをよく聞きますので、例えば定期的に先生方と同じ方向を向いて、同じビジョンを持って、理想かなとは思うんですけども、そういうことがあるといいかなと思います。なにしろ先生方が多忙で時間が無いということは承知しておりますので、なかなか保護者のほうからは、お時間を割いてお話を聞いていただきたいということをお願いするというのも聞いております。

(座長)

学校から時々呼び出されて、定期的に前向きに面談を持つ機会があれば良いというお話しは、主に学校に対して出てくる話しですか。幼稚園、保育園ではどうですか。

(委員)

幼稚園、保育園のほうは敷居は低いみたいですね。例えば、幼稚園、保育園は送り迎えの時に、お母様方と会う機会が多いので、そういうときに「今日〇〇ちゃんはこういうトラブルがありました。」とかいうことはよく聞くんですけど、なかなか学校に入るとそういう場面が少ないので、どうしても知りたいところは義務教育の学校というところになるのかなと思っております。

(座長)

幼稚園、保育園という送り迎えの時だったり、あとは連絡帳でのやり取りということはっきりされているかなと思います。その点、学校ですと毎日保護者が学校に行くわけではないということがほとんどですね。やっぱり問題があった時だけ呼び出しというパターンが多いんだろうなということだと思います。それから、さっき聞いていて面白いなと思ったのは、保護者のネットワークを園内で作って、その中で研修会を行ったりとか、ある程度の互助会的な要素ですね。「うちの子もこういうところで大変だったけど、乗り越えた」みたいなですね。そういうことは大体どの園でもされてるんですか。

(委員)

幼稚園はどうかかわからないですけど、やっている園は少ないかなと思います。先生はよくご存知だと思いますけど、うちには支援クラス「らららグループ」というクラスがありまして、そこに集うお母さんたちで、子どもとは別なんです。「子どもさんと一緒にできる何か企画をしましょうか」と尋ねると、「いえ、それは結構です」とおっしゃられるんですね。お母さんたちだけでお茶会をしたりとか、エアロビクスをしたりとか。そういった中で話したいと。子どもと一緒に親子体操とかは、「それはいいです」と。大体2~3ヶ月に1回、土曜日にやっています。色んな講師をお呼びして、アロマの講師を呼んだりとか、石鹸作りをしたりとか、ちょっと子育てから離れた中で、気持ちが和らいだ中でまた出てくる新たな悩みですかね。でもそれも時間が必要だとは思いますが。そんな中で「私も気になる子がいるから入ってみようかな。」とあって、そういったところの学級に入ってみてから、心を開いていかれる方もいらっしゃると思いますので、どっちが先かは分かりません。うちとしては効果が上がっている方法だと思っています。

(座長)

そうだと思うんですね。親同士を集めて、その中で主体的に保護者が子どもの気になる点を解決していく力、いわゆる、エンパワーメントしていくということですね。そういう意味合いは非常にあるのかなと思うんですけれども。

(委員)

申し遅れましたけれど、これはワンコインです。保護者の方にワンコイン支払ってもらって、講師謝礼や使うお茶やお菓子とかも保護者でという形で。

(座長)

講師というのは、具体的にはどういった人達が。例えば、園内の先生が担当することもあったりとかするんですか。

(委員)

今は、職員にエアロビクスのインストラクターの資格を持っている保育士がおりますので、それは大丈夫ですけれど。あとは、退職した職員で「今までは保育士として働いてたけど、本当はこういう仕事にも就いてみたかった」という職員が何人もいますよ。バレエにいたりとか。踊るほうのですね。あとは、アロマのほうにいたりとか。そういった異業種にいった職員に声をかけて「こんだけしかお金ないけど来てくれるかな」といった形でしたりとか。あと、とにかく私たち日頃接している職員があまり関わらないようにして、ちょっと様子を覗きにいくと「園長先生も入っていいよ」「どうぞ一緒に。」みたいに保護者の方から誘ってもらえると「じゃあちょっとお邪魔します。」と言って、担当の職員は一人おりますけれども、あとはもう職員も休暇を取って、ワンコイン払って参加するという形をとって、同じ立場という形で参加するようにしております。

(座長)

工夫点というか、もっと細かく聞いていくと色々工夫されているところが、あるんだろうなと思うんですけど。今のお話を聞くと、今までの議論の中で「難しい保護者が多いから、どう対応していったらいいか」というような話も出てきておりますけれども、保護者対応というか、そういった議論をしていく時に、いかに保護者をエンパワーメントしていくかということも同時に考えていくべきなんだろうなと思うんですね。例えば、保護者同士を集めてその中で、自主解決していけるような力を育てつつ、その中でどうしても困ったなというところに専門職が入っていくんですね。そういうところは恐らく、昔はある程度“親の会”というので、例えば障がいのある子が出てきたときに、昔は親の会の中で情報交換とか、実際の療育を親の会の中でやったりとか、そういったことをかなりやっていたと思うんですけど。総じて親の会に入る人が少なくなってきたっていうのもありますし、軽度の発達障がいとかになればなるほど、親の会には入らないですね。はっきりとした障がいでも重度のものがあれば、親の会にも入る人もいると思うんですけど。ですから親の問題、保護者の問題ということを考える時にいかに身近な相談機関というか身近な所属先である園といったところで、いかに保護者を支えつつ、エンパワーメントしつつ、これはやっぱり難しい問題があるなといった保護者にどう対応していくかを同時に考えていかないといけないんだろうなとは思ったところです。先生としてはいかがですか。専門職の立場と、あるいは専門機関として、学校や園と対応していくこともあるかとおもいますけど。

(委員)

私どもの施設は多機能型ということで、児童発達支援と保育所等訪問支援、放課後デイというものを行っております、そこには小学校1年生から6年生までのお子さんが、毎日ではないんですが定期的に通ってきてるんです。今年度初めて、デイに通ってきているお子さんたちの小学校の先生方に来て頂いて、ちょっとした支援会議とまではいかないんですが、情報交換会ということをしました。色々来ていただいたんですが、やっぱり先生方はお忙しいということを我々も知っておりましたので、一番、先生方が来て頂ける夏休みというところで設定させていただいて、想像以上に先生方に集まっていたので、そこで顔の見える情報交換ということでやったんですけど。そういう形は児童発達支援の幼稚園、保育園に通っている先生たちに、ひばり園の療育を見ていただいて、定期的に情報交換ということをしていただいているんですが、実際にそういうことをやってみると先生方は色んなことを思っただらんだなということ、顔を見てお話しすると感じることもあります。また、スタッフとお話しするよりも、そこに参加された先生方同士が「幼稚園ではこんなんですけど」、「じゃあこんな感じですかね」ということで意見交換をしていただけるので、本当に日々いろんなことに悩まれて、どうしたらいいんだろうと検討されている中で、ちょっとしたヒントがその中から見つけられるのかなということを感じております。どういった研修がいいのかなということで、色々な議論をしてみましたけど、講話的な内容というのは本当に全体的な内容を整理するのはいいのかなと思うんですが、それと併せて身近な情報を手に入れられるようなそういう研修会が合わさっていると、先生方にとっては「じゃあ次教室ではこうしてみようかな」というような情報提供になるのかなと思います。特に先生方は、自分がその場に居て何か喋って帰らないと、不完全燃焼な感じがあるので、ご自分が担当されているお子さんの状態を喋った上で、他の先生方のお話を聞いて、そこから共通の課題や解決策を見つけていくような、そういう会があるといいのかなと思いました。そして、すいません一つ。学校の体制のことはよくわからなくて、質問させていただくんですが、先ほど学校によって格差があるというお話が出てきて支援体制が整っている学校と整っていないという表現が正しいのかわかりませんが、整っている学校のシステムとかを聞く機会とかあるんでしょうか。自分の学校の中のことだけ、先生方は転勤があるのでそういうことは少ないのかなと思うのですが、自分の学校の中だけで、そういう情報しか入らなくて、ちゃんとやれてるといったら失礼ですけど、そういった学校の話聞く機会とかあるんですか。

(座長)

今の質問にどなたか答えられる方、いらっしゃいますか。小学校はどうですか。上手くいっているかは別にして、学校間での情報交換をする場というところ。

(委員)

特別支援教育コーディネーターの研修では、ブロックごとの話し合い、笑顔いきいき特別支援事業の中にブロックが決まっているんですけども、そのブロックの中で同じ地域の先生方との情報交換をしているので、「うちの学校ではこういう取り組みをしています」という報告はあるかなというところ。ただ、全体的に「こういう取り組みが成功しています」というような研修会というのは、個人的にも受けたことがなくて。一度、受けさせていただいたのは、北ネットの中で園と小学校の上手い連携が取れていたりとか、コーディネー

ターの上手い支援のあり方だったりを研修会で受けた記憶しかなくて。まだ、そういう研修会は少ないのかなという印象です。

(座長)

はい。ありがとうございます。中学校も同じ様な状況ですか。

(委員)

同じですね。

(座長)

結局ブロックごとの研修ですか。

(委員)

そうですね。そういう機会では集まる機会は無いですね。

(座長)

ありがとうございます。幼稚園、保育園という各園のオリジナリティというか、独自性というものをわりとどこでも作ろうとされますよね。けれども、学校は公教育なので、どこも一緒に等しくやりましょうというところがあるので、逆にここが上手くいっていませんよという話が出てきにくいのかなという部分が特徴としてあるのかなと思います。ひばり園さんは、ネットワーク作りという色々されていますよね。学校の先生達だったり、幼稚園、保育園の先生達を招いての説明会とか色々されていますよね。

(委員)

ひばり園に通っているお子さんの地域の先生たちに、年に2回来ていただいて、療育の様子を見ていただいた後に、意見交換会ということをしています。熊本市内だけではなく、市外、3時間ぐらいかけて先生たちに来ていただくので、本当に大変な中に来ていただいているのと、先生方を出していただけている管理職の先生方のご理解があつてのことなんですけど。そこで、園の様子と違うお子さんの様子だったり、保護者の状況だったり、あるいは逆に私たちも情報をもらったり、本当に参考になっています。

(座長)

それは土曜日とかにやってるんですか。

(委員)

それぞれ出やすい時期を考えて、幼稚園の先生なら夏休み中。夏休みが無かったら土曜日が良いかなとか。保育園の先生なら、逆に夏休みは難しいのかなとか色々考えてグループに分けたりとかして、デイの場合だと8月よりも、いくつか日程をピックアップしてとかいう形ですね。

(座長)

やっぱり、ひばり園さんが主催しているものだから、ある程度集まって情報交換も併せてできますよということがミソなのかなと。集まる動機にもなっているかなと思うんですよね。はっきり言うと、例えば、情報交換会をするにしても、誰がそれをファシリテートしていくか、引っ張っていくかということが問題になるんだろうとあってですね。ただ、顔つき合わせればいいものが出てきますよというわけではないと思うので。そうすると熊本市の療育ネットワークの中で、誰が顔合わせに準ずるような情報交換会を企画して引っ張っていくのかということが問題になってくると思うんですけど。ブロック研とかはどこがファシリテートしているんですか。

(委員)

ブロック研は総合支援課。

(座長)

司会とか誰が何喋るとかいうことは、全部、総合支援課が考えるんですか。

(総合支援課)

ブロック研は熊本市を5地区21ブロックに分けて行っているんですが、それぞれ21ブロックには拠点校をお願いしております、その拠点校の方が各ブロックのリーダー的な役割をしていただいて、1年間の計画を立てる。計画はブロックの先生方で立てていかれるんですが、拠点校が中心になって研修の内容を考えていかれます。あとは、熊本市内の5校の特別支援学校の巡回相談員、市立の小中学校からも7名、巡回相談員として指名をさせていただいておりますので、巡回相談員の先生方が各ブロックを回られて、指導助言等をしていただくという形です。

(座長)

やっぱり学校の先生たちがある程度自分たちで企画をして、情報交換をされるということ、先ほど、ひばり園さんがされている「まずは自分達の療育を見てもらう」という情報交換とはやっぱりちょっと違うのかなという気もしています。いわゆる、先生たちの研修としての機能を果たしつつ、それでいて情報交換会としての機能を果たすというダブルの機能も果たすので、かなり有効なんだろうと思います。そのあたりもう少し企画を立てていく、研修計画を立てていく先生たちがどういうのを立てるのかなということにかなり寄っちゃってるというか。そのへんをもっと戦略的に「こういう方向で行きましょう」ということを打ち出せるのかなということがポイントだと思うんです。そのへんは、教育委員会の仕事の範疇だと思いますので、ネットワーク会議でというよりは市教委のほうで、色々な手立てを打っていただければと思います。だいぶ話しが多岐にわたってきているという感はありますけれども、それだけ色々な分野からのお話しをしていただくことができるとも思います。だいぶ小学校中学校のほうに話しが偏りましたので、幼稚園、保育園の方はいかがですか。先ほど少しお話しはしていただきましたけれども。改めて、幼稚園、保育園のご意見というか。前回までの資料もご覧になりながら、「こういうことが」ということがもしあれば。

(委員)

前回も話題に上げたことなんですけれども、担当者の意見交換会、情報交換会の場があった時に、専門家の先生方が名札をつけてらっしゃるんですけど、そこに専門職を記載して欲しいということが、現場のほうから上がったことがありました。先生方が、臨床心理士と書いていただけると、グループワークでお話しする際も言語面はこの方に聞いてみようとか、心理面はこの方に聞いてみようとか絞り込んだ意見や質問ができるという意見があがっています。それで、何回か研修の場ではお願いして帰ってきているんですが、今年も駄目でしたということですので、よければ何をご専門の方なのか知りたい。逆に私たちもそうだと思うんですね。自分は副園長であるとか、発達支援コーディネーターの資格を持っているとか、年長児を担当しているとかが分かれば先生方からも話題提供があるのかなと思うので、そういう目に見えた開示の仕方みたいなのも必要かなと思います。それから、ずっと接続の問題が議論にあがりますけれども、今度4月から施行された「子ども・

子育て支援新制度」の中で小学校との接続支援という項目が新たに設けられまして、それが私どもがいただく公定価格の中に加点として追加支給があるんですね。その接続支援というのはどういうことかと言いますと、このように今から送り出すお子さんのことに関して、先生方にきちっとお伝えをして先生方からも返していただき、その子のカリキュラムを一緒に作ったり、せめて年長から上げるときのいわゆる3学期分は先生方に入っていたください。小学校1年生の1学期分は私たちも入って、お話を進めるというような移行のための接続もその中に含まれていますので、私たちも新たな接続分野として受け止めていますから、それが新しく評価されたというふうには受け止めて、もちろん勉強も必要ですけど、お互いの連携がもっと上手くいくようになるんじゃないかという期待をしているところがあります。

(事務局)

先生、ちょっとすいません途中で。今は、その接続のところをいろいろ学校側と移行支援のいろんなことを検討されるというところが、保育料か何かの加点になるんですか。保育料が高くなるとか。

(委員)

運営費、公定価格があがるわけです。そういうことを学校との連携していけば。

(事務局)

例えば、10例やったとか。

(委員)

じゃなくて、全体の運営費の1%加点とか。

(事務局)

ないよりも助かりますね。

(委員)

それはもちろんです。今までやってきてることなので、それを後はどのように整理して、どなたにでも分かりやすく見せていくかということだと思います。ただ、「小学校の校庭に3歳児が散歩に行きました。」では駄目です。そういうことで、ただ一方的なことではなく、お互いにやりとりということなので、そこを深めていっているところです。あとは、人的な余裕については努力していかなければいけません。ということと、発達支援コーディネーターがせっかく各園におりますので、フローチャートは大変助かっています。新卒、経験の浅い職員にとって非常に分かりやすいので、まずそこからスタートしてみようかということの取り掛かりとしては、良いものを作っていただいたと感謝しております。あとは、保護者の方には、例えば「明日の朝台風が来ますから、登園のときはこういう段階で判断いたしますよ。」というのを、今日全員に口頭で伝えましたので、そのように1人1人同じことを繰り返しながら丁寧に関わっていくということを意識しなければいけないと思います。

(座長)

今、お話いただいたように前回からも話題になっていますけど、具体的にはやっぱり接続の問題ということと、研修の問題と、いろいろあるのかなと思います。接続の問題については、公定価格の改善というか改正があって、非常にそういったことが、逆に言えば、よりしっかりとやっってくださいというようなことが求められているんだろうということが

ありますけど。どうでしょうか、接続ということに関しては、前回からも議論で色々ありましたけれども、保育要録と移行支援シートとの関係の問題とかですね。先生たちのほうからはどうですか。幼稚園側からの状況とか課題とか何かありますでしょうか。

(委員)

今、新制度のことがお話しに出ましたけれども、本当にそれぞれの園で今年から変わったところ、また来年から変わったところ、また、新しい子どもへのとか、いろんなことが難しい時期にあるので、なかなかややこしいというか、それぞれの園が色々大変な時期だなと思っております。そんな中でも色々連携をとって小学校との接続はしっかりしていかなければいけないなと思いました。あと、先ほどの保護者の方のことですけど、特別支援学級のある園では保護者のネットワークがあって、色々情報交換をしたり色々な会があって、また保護者の方も色々な親の会とかに入っているなど、そういうのがありますので、色々な園でされていることはないのかなと思うんですけど、そういう取り組みが広がっていけばいいんじゃないかなと思いました。

(座長)

ありがとうございます。保護者の問題、接続の問題についてのお話がありましたけれども、どうでしょう、学校側からすると、接続といったことで小学校はどうでしょうか。

(先生)

接続については、以前よりは移行支援シートや保育要録の活用というのが出来つつあるのではないかなというふうに思っています。だいたい2月くらいに園訪問とかありますので、そこらへんで色々情報を提供していただいて、それで支援をやっていくところなんですけども、やはり学校によりけりなんですけれども、園訪問を行う場合というのは低学年担任が多くて、そこに特別支援コーディネーターが入る学校と入らない学校とがあったり、教務あたりが入ってくる場合もある。ここらへんが学校によってかなり差がありますので、そうすると、言ったんだけども伝わっていないとかですね。そういったところの現状というのが出てきますので、そこらへんも各学校で統一していかなければならないのかなというふうに1つは感じています。もう1つは接続の問題というか、小学校1年生になる段階だけではなくて、入学した後にどう変わったかというのは園の先生方は気になられるところだと思うんですけども、そのあたりがどういった支援を行って、こう変容しましたというのを報告する場というのが、今の段階では幼保小中連携の日というのが学期に1度くらいありますが、その時の機会で行うか、それか学校によって幼稚園、保育園の先生方に授業参観みたいな形で1年生の様子を見に来ていただく日というのが、1日くらい取ってある学校もありますけど、そういった時ぐらいしかないの、もう少しそのあたりを深めていく必要があるのかなと感じています。

(座長)

だいたい2月くらいに園訪問、さっきの話だとやっぱり3学期期間中から1学期みたいなものがあるじゃないですか。3学期はしっかり見てもらって、学校の先生も含めていわゆる園生活を過ごしてもらって、入学した後の1学期間も一緒に考えていくのが望ましいんじゃないかという話しでしたけど、やっぱり2月くらいにしかできないじゃないですか。

(委員)

特別支援学級に入学される子どもさんに関しては、事前に情報提供いただいたりとか実

際に1日体験であったり、そういったのをすることが多いんですけども、通常学級に入学しているお子さんに関しては、引継ぎ等そのあたりというのが、どうしても担当がそういう園訪問とか行うのが、教務が管理していくところなので、そこらへんをコーディネーターが管理するわけではないので、そのあたりで3学期になってしまうのかなと思います。

(座長)

なるほどですね。例えば、保育要録とか、あるいは移行支援シートはいつくるんですか。就学時健診は、10月とか11月にありますよね。その後くらいにくるんですか。あるいは全部終わってから、3月になってからくるんですか。

(委員)

だいたい、2月下旬から3月くらいが多いですね。

(座長)

というわけですね。今のお話で言うと、やっぱり基本的に移行支援というのが、保育要録とか移行支援シートというのは、ある程度の形として、いわゆる連携が成り立ったところで回っていくもので、実際は、そのちょっと前の段階から、例えば顔つなぎ的な意味での顔合わせみたいなことがあって、それから徐々に子どもの具体的な内容について申し送りが出来てきて、結局、移行支援シートに記載してあることは「これは確実に引き継ぎましたよ。」と言ったような、ある種の最低限というか契約じみた形のものなんじゃないかなと思いますよね。そう考えると、実はもうちょっと早い段階から保育園、幼稚園と小学校の連携、移行ができないかなと思います。特に、顔が見える連携という言い方をするとあれですけども、それを促していくことが1つは重要なのかなと少し思うところですよ。ひょっとしたら、上手くいっているところは、早い段階から先生が時間をかけて回っているわけでしょう。おそらく。

(委員)

そうですね。

(委員)

幼稚園のほうに夏休みに小学校のほうから来られているところもありますね。

(座長)

おそらく、夏休みくらいが、先生たちも校外に出て色々回りやすい時期ということもありますし、夏休みくらいの段階である程度、保育園を回っていく中で、その後の就学時健診とかもありますし、あるいは障がい重度、中度くらいになると、その前の段階から学校訪問とかされて、学校側が就学相談されているというのは結構多いと思うので、そのあたりの時期から実は動いていって、そのためには先生の顔と名前がお互い分かっているとといったような関係、ネットワークを作っていくというのが実は結構いいんじゃないかなという気もするんですけど。そのあたりは、なかなかここでどうやってネットワークを作っていくのかというのは、なかなか難しいものがあるかなと。

(事務局)

今のお話ですね。結局、地域の中で子どもが保育園、幼稚園から学校に移っていくとおっしゃったように、出来るだけ早く学校の先生たちと顔が見える連携を進めながら、その子どもさんの特性をしっかり学校のほうに分かっていただいて園の中でしているような工

夫を学校の中でも上手く関わってやっていただきたいなということで、この前、南区のブロック研修の中に保育園、幼稚園のコーディネーターの先生も一緒に参加していただいたのですが、「みなわ」だったり、「りんく」だったり、東稜高校の先生だったり、支援に関わっている方々に集まっていただき、いろんな情報交換をして、また小さなグループごとに連携のつなぎ方などの話をしていただきまして、その中で色々顔が見えてきて、こういう思いで園の先生は学校に繋がたいと思っていらっしゃるんだなど。あるいは、学校の先生方の思いというの、園の先生も分かっていたりということで、顔の見える連携というのを南ブロックでもされております。東ブロックのほうでも、同様な取り組みをしていただいております。その前には北ブロックのほうで最初にされていて、ブロックごとの勉強会みたいなこととリンクしながら、顔が見える連携ということで移行支援の流れというのが、だいぶ進んではきています。こういうふうなところが、先生もおっしゃったように夏休みくらいの早い段階で、繋がりがもっと濃厚にできていけば、もっと良い支援になるのかなと思います。実は、夏休み頃に繋がるのは、ほとんど支援クラスの活用の方が中心かなと思います。通常クラスの子たちというのは、どうしても遅れてしまうのかなと気にするところではあります。

(座長)

その、通常クラスのお子さんに関しては、やっぱりコーディネーターの人が中心になって校内の中でしっかりそこを築いてもらうということを求めていくしかないのかなと思うんです。そのブロック会議は、さっき総合支援課が言ったものですか。

(事務局)

そうです。

(座長)

そこに保育園、幼稚園の先生を呼ぼうとか、声をかけようとかは誰が決めるんですか。

(事務局)

それはブロックの拠点校が。

(座長)

拠点校の先生が企画をしているときに、保育園や幼稚園に声をかけようということですね。

(事務局)

そうです。それと南ネットのスタッフ。子ども発達支援センターもその中に入っています。

(座長)

なるほどですね。おそらく今の話はブロック会議の機能拡張の話だったと思うんですよ。ブロック会議というのをそれぞれのブロックごとに研修を深めていきましょうというような役割から、その中での情報交換、あるいは地域連携、あるいは移行支援みたいな機能もしっかり持たせていきましょうというような意味でのことなので、おそらくその機能を拡張するというのを打ち出すのであれば、それはそれで市教委のほうで「これはどういう集まりとして今後展開していきます」ということを打ち出していただくということが必要だと思うので、そこは市教委のほうで持ち帰っていただいて、総合支援課のほうでいろいろ検討していただいてもいいのかなと思います。他いかがでしょうか。先生い

かがでしょうか。

(委員)

そうですね。いろんなところにお手伝いができるのかなと思いますが、組織自体が今からなので、うちの組織もまだ課題が多いのかなと感じます。

(座長)

もちろん、ブロック会議とか、そのへんの機能を拡張していくとなった時には、おそらく様々な専門職の方々にいろいろ入ってもらって、多角的な理解を進めていく必要があるのかなと思いますので、そういった意味では作業療法士もそうですし、臨床心理士とか、あるいは子ども発達支援センターにもいろいろ専門職の方がいらっしゃいますので、そういった方も是非ブロック会議等で顔つなぎをしていただければと思っております。他よろしいでしょうか。今日は、全体的には多角的な面でお話しただいて、どちらかというところまで議論になっていたことをもう少し深めていくといったような内容がほしい多かったですかなと思います。その中で特に、何度も出てますけれども、保護者支援という問題とネットワーク作りといった点である程度の論点はかなり絞られてきたかなと思っています。特にネットワーク作りということに関していうと、いわゆる実際に顔が見えるような支援体制をどう作っていったらいいか、どのような場で、どういうことを促していくのかといったことであるとか、あるいは保護者支援といったところについても単純に専門家が入ってうんぬんといった意味ではなくて、あるいは保護者のエンパワメントをどうしていくのかとか、そういったことも必要ではないかなといったことが中心になってあげられているんじゃないかなと思います。次、もう1回の開催を残してということになりますけれども、今日、議論いただいたことをそれぞれお持ち帰りいただきまして、次回はまとめということになりますので、それまでのいろいろとご検討いただければというふうに思います。それでは、司会にお返ししたいと思います。よろしく願いいたします。

(事務局)

丁寧な進行をしていただき、どうもありがとうございました。委員の皆様には長時間にわたり御意見をいただき、誠にありがとうございました。最後に次第4その他、次回の会議の開催日についてとなります。平成27年11月9日(月)の開催を予定しております。これをもちまして、本日の会議は終了となります。委員の皆様方には、心から感謝申し上げます。本市における療育のネットワークが、より一層充実していくことを願っておりますので、皆様方には今後ますますの御支援と御協力を賜りますよう、重ねてよろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。